

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

姫隸調教師

小説 水坂早希

挿絵 田宮秋人

第一章	姫隸調教師	008
第二章	宮廷社交場での初調教	036
第三章	調教初日	065
第四章	錯綜	097
第五章	逆転	125
第六章	舞踏会	168
第七章	狂宴	191
終章		234

登場人物紹介

Characters



リセーラ・ヴェルデ

格式高いヴェルデ家の当主にしてフリジアきっての姫隸調教師。宮廷社交界の花。

テルテ・ラエル

父親の借金返済のため姫隸となるべくリセーラの元へやってきた、没落男爵家の娘。

リーゼロッテ

イルード伯爵の姫隸。再調教のためリセーラに預けられている。

イルード

フリジアの伯爵。リセーラに想いを寄せる壮年の紳士。

ユグベルジュ

ミシエルの十二聖騎士の一人。リセーラの父親の仇。

「——や、やめろっ、貴様らっ、放せっ……放せえっ……くっ……！」※

リセーラは二人の若い男に左右から手足を持たれて持ち上げられ、幼女が用を足させる羞恥姿勢で固められた。豊満な美乳が露わになり、四人の男が色めき立つ。

腕状に膨らんだ二つの脂肪の頂点で、桜色の乳輪が上品に膨らんでいる。その中心にある同色の乳首は、ツンと上を向いて、乳飲み子を誘うようにヒクヒクと鼓動を打っていた。「へえ。リセーラ様、私よりは少し小さいけど、綺麗な形と色の胸してますね。……さて、こっちの作りも見せてもらいますよ？」

胸脂肪を揺らめかせて羞恥に身をよじるリセーラの、薄桃色のドロワーズの前が美女の手で残酷に割られる。左右に花開いたフリルに彩られてぬらりと恥部が露出し、濃い雌匂が湧いた。恥丘に張りつく恥毛は薄く真っ直ぐなため、陰肉の咲きざまがありありとわかる。薄桃色の肉花が整然と二重ほど咲き綻んだ、少女と大人の境目の初々しい陰唇だ。

「あらあら、こっちも綺麗。テルテちゃんには到底敵わないけど、幼い作りですね」

リーゼロッテの声に、テルテやサラたちの微かな悲鳴と男たちの荒い息が重なる。リセーラは、周囲の声すら耳に入らないほど動揺していた。

調教地獄から抜け出した十四歳から、五年間積み上げてきた人間としての誇りが、いとも簡単に削られていく。羞恥が子宮をコトコトと煮込み、脳裏に調教の悪夢が蘇る。

もう腰を撫でる黒髪も、耳まで朱色に染まった美貌も、膨らんだ乳首も、儂く震わせることしかできない。やや吊り上がった柀内を満たす藍紫の瞳が、決壊しそうに潤む。

気を抜くと、弱音を吐くどころか、五年の月日を逆行して、調教を求めてあられもない声を上げてしまいそうになる。蜜壺からだらしなく甘い涎を垂らすことを止められない。自らの正体を知らされた気がして、情けなかった。リーゼロッテの言う通り、蒼流が使えなければ、リセーラは十九歳のごく普通の少女——いや、同年代のどの姫隷より調教の行き届いた、性玩具でしかなかったのだ。

それでもなおリセーラは、陰唇を覗きこむリーゼロッテを射殺すほどにきつく睨んだ。「そんな怖い顔してもダメですよ。さあ、リセーラ様。今からココにご主人様の肉が入りますから、くちやくちやとよく噛んで、奥までたっぷりと食べてくださいね」

後ろから伸びた美女の手が、薄桃色のフリルと一緒に、二重の肉花を左右に割った。

真下には、食卓に寝そべった伯爵の凶悪な男根。用を足す姿勢のまま、リセーラの身体が下ろされていく。伸ばされた桜色の陰唇と、どす黒くぬめる亀頭がクチュリと接吻する。陰唇に亀頭の先が埋まった瞬間、リセーラの背筋に得体の知れない怖気が走った。

「やっ、やめ、ろ……くあっ……やああっ、くっ……ふああっ……！」

膨らむ亀頭が過ぎ、膣口が亀頭冠下をクチリと食い締め、みちみちと陰茎の断面に沿って桜色の肉が拡張されていく。五年間萎んでいた膣道が、懐かしい腐肉で満たされていく。

「やめっ、ひゃうっ、もう……入れ、ないで、——やめてっ……！」

自らの口から漏れた女言葉に、リセーラが一番動揺した。周囲のざわめきが増す。

亀頭冠が肉褻の寄った膣道を挟り進むごとに、戦慄にも似た快感が子宮で膨らみ、なす術もなく『女』に戻される。身体が変だった。ただ五年ぶりに男根を挿入されただけで、ここまで感じるわけがない。脳裏に靄^{もや}がかかり、現実と悪夢との境界がぐにやりと曖昧になる。とうとうリセーラは、伯爵の肉椅子に根本まで着席してしまった。

羞恥姿勢を強いていた左右の若い男が、ようやく四肢から手を離す。

リセーラは羞恥と黒い快感で狂乱しそうになり、少しでも身体を隠そうと、裸の伯爵にすがりついてしまった。膨らんだ乳首が男の胸板を押し、乳房が水風船のように潰れ広がる。夢の中で何度も繰り返した姿勢を再現してしまい、また背筋が怖気立つ。

伯爵のおぞましい腐肉塊が膣内で、トクトクと脈を打っているのがありありとわかる。ドロワーズのギャザーのように肉褻が寄った膣道が勝手に蠢き、うねり、搾り、伯爵の龟头を亀頭冠を肉茎の血管を、美味しそうにくちやくちやくと咀嚼してしまう。

血を吐くほどに嫌いな男が下にいるというのに、屈辱感すら忘れるほどの快感が湧く。なにかが変だ。肉茎を食い締めるたびに理性がごっそりと抜け落ち、脳裏が男の存在で埋め尽くされる。子宮がギルギルと鳴って狂喜している。また奇妙な既視感が湧く。

——間違いない。リセーラはこの肉を知っている。忘れられるはずもない。

黒い戦慄が走り、尾骨から脳天へとゆっくりと粟立っていく。伯爵が耳元で低く笑った。「こうして私に座るのは、五年ぶりだな」

嫌な確信があった。下から見上げる笑い皺の寄った顔は、よく知っている気がした。

「リセーラ殿、口封術は知っておるだろう？ 特定の秘密を、完璧に口外できなくさせる呪術だ。口頭はもちろん筆記、態度ですらも秘密を話せなくなる。私には、この術がかけられておつてな。そこにいるヨールの手腕によって、今朝ようやく術を解くことができた」背中から父親の亡霊の声がした。

「私は十一年前、友人である調教師の仕事を手伝った。調教相手はなんと友人の実の娘で、まだ八歳のそれは美しい少女であった」

——ほらリセーラ、お前の大好きな×××殿の精液だ。もつと喜んで飲み干せ。

「……あ……」

「その少女と私は驚くほど肉の相性がよくてな。私は今まで寝たどんな貴婦人より、その八歳の少女に夢中になった。私は毎日のようにその子の調教を手伝い、六年間も通った」

——さすが×××殿だ。ほらリセーラ、もつと腰を蠢かせて×××殿に恩返ししろ。

「……あああ……」

「五年前、少女の調教が完了した頃、戦乱の兆しがあつてな。私は領地へ帰らざるをえなくなつた。そして、戦争が終結した半年前、首都へ舞い戻った私は驚愕したよ。社交場で

成長した少女を目にしたのだからな。もつとも、その子は私を忘れていたようだが」

脳裏に、幼い少女の叫びが蘇る。

——いいのっ、いいのおっ、リセーラもつとお腹を動かして奉仕しますから、イ×ード様もいってくださいいっ。リセーラ、イルード様に虐められるのが大好きなおおっつ！
リセーラの全てが、——五年前へと突き落とされた。

「いい肉に育ったな、リセーラ」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ！」
身体が伯爵の胸板や腹筋や男根に、ずぶずぶと沈んでいく。脳裏から子宮の底までも、どす黒い伯爵色に汚れていく。狂乱して陰唇を食い締めると、爆発的に快楽が膨らんだ。

「ひやああああああっつ！ い、嫌っ、嫌ああっ！ こんな嫌ああああっつ——！」
普段のリセーラからは想像もつかない甘やかな狂乱ぶりに、椅子に座らされたテルテやサラたちメイドが凍りついたように目を見開く。リーゼロッテの高笑いが重なる。

「今頃気付いたみたいね。私も今朝知って、驚いちゃった。リセーラ様が、八歳の頃から実の父親に十四歳まで調教されて、伯爵様も協力してたなんてね。身体に火傷の痕なんてないでしょ？ あるのは、心の傷だけですよね？ 実の父親と伯爵様に六年間いたぶられ続けた心の傷だけがね！ ほら、どうなのリセーラ様、五年ぶりの肉の対面は！」

テルテやサラたちメイドの驚愕した視線が、肉椅子に腰かけるリセーラを串刺しにする。

屈辱感も誇りも、体内に埋まっている肉に吸い取られていく。それでも羞恥だけはなくならず、際限なく膨らんでいくのはそう調教されたからだ。死にたいほどの恥ずかしさに襲われ、ついに藍紫色の瞳から涙がこぼれ、朱色の頬を伝い落ちて伯爵の笑い皺を濡らす。なんとか心をつなぎ止めようと藻掻くものの、肉の接合部から甘い蜜が漏れるばかりだ。

「……イルード……伯爵、そんな……そんな……こんなの、酷すぎる……」

「なにが酷いものか、こんないい身体になりおつて。このくびれた腰と腹、尻の張り具合」
下から伯爵の両腕が伸び、腰のくびれ具合をサワサワと撫でた。腹と背筋を指でくすぐり、ヘソに指先を埋めて子宮をぐちゅりと圧迫してくる。ドロワーズの尻を何度も叩く。

「……ひゃうつ……叩く、な、やつ、ひつ……だめっ……触る、なあ……ふああつ……」

「それに乳房も大きくなつたな。昔は乳首だけが大人並みに膨れて滑稽だったがな」

伯爵の胸元に押しつけていた双乳が、下から両手で掬われた。たふんと揺れた脂肪に引かれ、背筋を真っ直ぐに伸ばされる。節くれ立った十指が蠢き、脂肪が無限に形を変える。

「や、あつ、胸……そんなに揉むなっ、ひつ、揉むな……もう揉むなあつ、止めろおっ」

リセーラの美乳をたぶたと揉み続けている伯爵に、リーゼロットが話しかけた。

「リセーラ様の乳首って、子供の頃から、そんなにやらしいほど大きかったですか？」

「ああ。この子は乳首をいじられるのがたいそう好きでな。九歳には、乳首だけが今と変わらぬ大きさに熟れ育ちおつた。この子を四つん這いで犬引きするときは、両乳首に結わ

えた糸を引き綱とするのが常だった。泣きながら喜んで足元にすがりついてきおったぞ」
「ま、最低。乳首で犬引きされて喜ぶだなんて。今の綺麗な乳房に騙されましたけど、リ
セーラ様って、そんないやらしい乳首好きの変態だったんですね」

「……い、うな……ふあっ……イルド、伯爵……くああっ……そんな、こと……」

リセーラが羞恥と快感で美貌を俯かせると、縦横無尽に揉み上げられる双乳が見えた。
灼熱する脳裏に、この屋敷中で犬引きされた記憶が蘇る。前は乳首を糸で引かれ、後ろ
は裸の尻を叩かれて追い立てられた。少しでも歩みを止めると、浣腸をされて尻を押され
る。結局リセーラは、犬引きされながら肛門を裏返して排泄を繰り返すしかなくなるのだ。
「なにより素晴らしいのは、この蜜壺だ。肉襞に覆われた膣道が私の肉を食い締めて蠢き、
肉竿と亀頭の断面を隅々まで丹念に舐め回してきおる。まだ動かしておらんとは思えんほ
どの心地よさだ。この子は元より名器なうえに、恐ろしく私と肉の相性がいいからな」

言いながら敏感な両乳首が摘まれ、肉こよりを作るように乳輪ごと転がされる。

「んあああつ……そこ触るなつ……胸の先……やめつ……ち、乳首だめえつ……」

「へえ。お二人って、そんなに相性がいいんですか？　なんだか私、嫉妬しちゃいます」

「こればかりは仕方あるまい。肉の相性は生まれつきのもものだからな。私も具合がいいが、
この子はそれ以上だ。いつも私が達する前に、上り詰めたまま下りられなくなりおる。私
があまりの心地よさに我を忘れると、いつもこの子は気絶しておるのだ。……私の肉で、



何百回……いや何千回と達しただろうて」

「まあうらやましい。リセーラ様って、伯爵様の肉でそんなに虐めてもらってたんですね。でも、何千回だなんて、姫隸というより、ぐちゃぐちゃどろどろの肉奴隸ですね」

ようやく両乳首が放され、リセーラは力つきるように、また伯爵の胸にすがりついた。もう屈辱感すらも関係ない。膣内を埋め尽くす肉塊に心の底から戦慄していた。

伯爵の話は本当なのだ。この肉が動いたとき、どんな反応を示してしまうのかが怖い。十九歳の身体は、当然のように昔より遥かに熟れ育って敏感になっているのだ。

「ほれ、今よりこの肉を動かす。ここにおる皆も見えておれよ、冷徹で強く美しい女主人、リセーラの狂いようを。この子が、どれほどの艶めいた声を上げるのかを」

伯爵に頭を撫でられ、リセーラの歯がカチカチと鳴った。背筋の怖気が止まらない。

「……やめろ……動くな……頼む……イルード伯爵っ、——ひくうううっっ！」

鍵と鍵穴のようにピタリと合っていた肉の密着が解かれ、ついに激しい上下動が始まる。押しこまれると亀頭の形に膣道が拡張され、引き抜かれると異常に膨らんだ亀頭冠が、リセーラ特有の髒粘膜を容赦なく抉り舐めていく。脳裏が伯爵色に染められ、子宮がギョルルと搾られる。より一層脱力して、伯爵の皺だらけの顔に可愛らしく頬ずりしてしまう。

「動くなっ、動かないでっ、お願い……だからあつ、やあつ、やめてっ、あふううっっ！」

食堂に、普段の冷厳なりセーラからは微塵も想像できない、妖艶な嬌声が響く。

伯爵は勿論のこと、他の三人の男も股間を、より一層はちきれんばかりに膨らませる。テルテとサラたちメイドが真つ赤な顔で硬直する。膝を摺り合わせる少女が多くなる。

「あつ、ああうつ、くつ、あふうつ、これ駄目えつ、とめてつ、もうとめてえつつ！」

「あらあら。リセーラ様つて、こんな可愛い声が出せたんですね」

「なんのなんの。まだ、こんなものではないぞ？　こうして颯つていると次第に、もつと口調が丁寧になる。敬語で可愛らしく叫ぶリセーラは、そそられるぞ？　ほら、リセーラ。止めてほしかったら、いつも言っていた敬語で懇願するがいい」

伯爵の肉塊が、縦横無尽に膣道の敏感な壁を抉っていく。子宮口を亀頭でコツコツと何度も叩かれ、膨らみきつた陰核が腰に当たる。幼さの残つた陰唇はもはやめくれ裏返り、肉茎の動きと同期して、大量の粘る蜜がぐちぐちと噴き上がる。女匂が湧き、溢れこぼれる蜜が、ドロワーズの太腿ギャザーをみるみる透明にして、伯爵の腰をべつとりと濡らす。リセーラは、自分が確実に狂っていくのを感じた。もはやどうやっても、この快樂地獄を乗りきる術が見つからない。子宮が男の肉塊に乗っ取られ、突き上げとともに腰と黒髪を儼く弾ませることしかできない。全身の白い肌が朱色に染まり、瞳に涙の膜が膨らむ。五年ぶりの絶頂に達する寸前、唯一の乗りきる術を思い出した。一瞬の躊躇もなく叫ぶ。「もうお許しくださいいっ、お願いですから、動かないでくださいいっ、イルード様あつっ！」

——場がしんと静まりかえった。

男根がピタリと止まり、絶頂間際まで追い詰められた身体が、ゆっくりと冷えていく。五人の乱入者が四方から哄笑する。リセーラの全てが汚辱の沼底へ叩き落とされた。ふいに泣き叫びそうになり、伯爵の胸に子供のようにつきついて菌を食いしばる。「よしよし、可愛いやつだ。それでこそ、リセーラだ。わかった、動かないでいてやるから、代わりにリーゼロッテに尻を觸られるがよい」

伯爵の指が黒髪を梳き、溜まった涙を拭き取る。リセーラは、ただ力なく震えていた。

※

リセーラは騎乗位で挿入されたまま、裸の伯爵に俯せですがりついていて、背中が扇状に散り広がる黒髪から突き出た白い肩が、荒い息に合わせて扇情的に上下している。

理性が戻ってきたが、蜜壺に凶悪な肉を入れられて脅迫されている状態では、抵抗などできるはずもない。屈辱感とそれを上回る羞恥が湧いて、余計に辛くなっただけだ。

もう机の両側から視姦する、テルテやサラたちを見る勇氣もなかった。右から絶え間なく聞こえるすすり泣く声は、間違ひなく三つ編みの少女のものだろう。

『もうお許しください、イルード様あ』だって。リセーラ様、可愛かったですよ！

リーゼロッテに嘲笑され、また顔中が朱に染まる。俯いたまま怒鳴った。

「……う、るさい……黙れ……！」

口にしてから恐怖に駆られ、鼻息がかかるほど間近の伯爵を、おずおずと見てしまう。

「動きはせんて。今度は、普段の気高いリセーラの鳴き声が聞きたいからな、そう簡単に狂わせはせん。どうした？　そう可愛らしい怯え顔で見られると、突き上げたくなるぞ？」

いつの間にか心すら屈服していることに気付き、唇を噛んで長い睫を震わせた。

「さあ、リセーラ様。ぐしよぐしよに濡れた、恥ずかしいお尻を見せてもらいますよ？」

リーゼロッテの手がドロワーズにかかり、肉茎で固定されたお尻がひくりりと跳ねる。

薄桃色のフリルが花の蕾を模したようにふわりと広がる絹袋は、もう尻の下半球がべったりと透けている。半透明になったフリルの切れ目を真ん丸と花開かされ、ぬめり光るお尻がぬるりと剥け飛び出す。尻房がさらに左右へ割られ、リセーラの濃い雌臭が湧く。

「うわっ。リセーラ様、あそこは綺麗なのに、肛門は黒ずんで凄い皺が広がってますね」

リセーラの肛門は白い尻房とは対照的に黒ずんだ褐色で、肛門皺も最大口径を示すように、長く放射状に拡散している。恥じらって尻房をきつく閉じて、肛門皺の蠢きが見えてしまうほど、淫猥な広がりようだ。リセーラは伯爵に乳房を押しつけて恥辱に耐えた。

「仕方がなからう。リセーラは八歳の頃から、肛門で大人の肉を食べておったのだぞ？」

幼い頃に拡張された肉皺が成長して、より広がったのだらうて。見かけは悪いが、具合は絶品だ。それに、リセーラも肉で肛門を広げられるのが大好きだな。私の膝に座って食事をするときは、必ず肛門で肉を受け止めておったわい。そうして陰唇に両手を食いこませて自慰をしながらはしゃいで、私に料理を食べさせてもらうのがお気に入りだったな」

「……ああつ……もう、もう、昔の話はするなあつ……！」

言うまでもなく、肛門で進んで受け入れたのは、伯爵の肉を蜜壺に入れられるのが怖かったからだ。肛門をこね上げる伯爵に料理の世話をしてもらいながら、リセーラは両手で苛烈な自慰をして、脚をばたつかせて喜んでいた。もちろん、全て強要されたことだ。

「うわっ、最低。リセーラ様、そんな変態みたいなことまでしてたんですか？ この黒いいやらしい肛門は罰が当たったんですね。さ、とにかくこの黒ずみを脱色しましょうか」
リーゼロットが鞆から透明な粘液が入ったガラス瓶を出した。

姫隷調教師であるリセーラには、当然、その脱色液の種類がわかってしまう。その薬は呪術のかかった脱色液で、通常は何日もかけて色素を抜くところを、半日で落としてしまう強力な薬だ。姫隷へのきつい罰に使われるほど、猛烈に染みてしまうのだ。

美女が手袋をして、透明な脱色液を掬い取った。

背筋が震え、剥け飛び出したお尻を沈ませると、亀頭がクプリと子宮口にはまってしまふ。甘い呻きが漏れて震えている間に、放射状に長く広がる褐色皸全体に、粘液をこんもりと盛られてしまった。途端に、刺すような痛みが肛門を覆う。細い腰が今度は苦痛で痙攣して、コリコリとした子宮口で伯爵の鈴口を愛撫してしまう。一気に、藍紫の腫が潤む。

「さあ、こんな汚い肛門じゃ、皸の奥の奥まで擦りこまないと効かないですからね。リセーラ様の大好きな男の肉で、直腸ごと肛門の皸をかき回してあげますからね」

肩から黒髪を流して後ろを見ると、食卓に上がった若い男が膨れあがった腐肉塊を露わにしていた。伯爵には及ばないものの凶暴な形状で、黒々とぬめり光って躍動している。

リセーラの精神がまた袋小路に追い詰められた。歯をカチカチと鳴らし、伯爵を睨む。

「や、やめろっ……今……同時にされたらっ……イルド伯爵！ 止めさせてくれっ！」

「観念しろ、リセーラ。私も部下に褒美を与えねばならんな。ほれ、その呪術のかかった脱色液は、女には地獄の薬だが男には無効だ。安心してかき回すがよい」

若々しく膨らんだ亀頭が、粘液の盛られた肉皺に埋まる。五年ぶりとはいえ、調教の行き届いた肛門だ。褐色の皺が陰唇のようにめくれ裏返り、進んで亀頭をくちゅうりと包みこんでしまう。大量の脱色液にくるまれた男根が、苦もなくミチミチと押し進められていく。

肉皺と腸管に激痛が走り、リセーラは仰け反って艶やかな黒髪と美乳を振り乱した。

「んああああああああっ！ 痛っ、痛い、痛い、痛いっ！」

その甘い絶叫に興奮したのか、若者が息も荒く苛烈に腰を使い出した。

直腸が五年ぶりに耕され、猛烈な黒い快樂が湧く。が、それを押し隠すほどの疼痛が直腸粘膜を襲い、リセーラらしくもない甘叫びが切れ切れに漏れてしまう。若者はさらに鼻息を荒くして、もっと女調教師の叫びが聞きたいとばかりに、わざと抜き差しを大きくして、より大量の薬液を腸奥まで塗りこめていく。粘膜越しに伯爵の男根とこすれ合う。

「ひっ、ひいいっ、やっ、やめろっ、痛、痛い、奥、そんなに奥まで塗るなあっ！」

「ははっ、これは初々しい。このリセーラの、生娘のような痛がりようはどうだ。さて、痛がつてばかりでは可哀想だ。私が救つてやるぞ?」

伯爵の肉が蜜壺の最奥で動き出す。上下の責めこそしないが、子宮口を鈴口で愛撫するように周回して、腹の底を抉り回してくる。若者が皮一枚越しに龟头を連打してくる。

伯爵のそれだけの動きで脳裏に霧がかかり、痛みとともに理性がとろけていく。

「やっ……やめっ、伯爵は……動くなああっ! やあっ、駄目っ、駄目ええっ……!」

リセーラの直腸が肉を搾り上げるように蠢き、若者が情けない声を上げる。あっさり肉塊が蠢動した。薬液で腫れた粘膜に、びゅくりびゅくりと熱い腐粘液を叩きつけられる。懐かしくもおぞましい精液浣腸をされた瞬間、リセーラは五年ぶりの飛翔をした。

「い、やああああああああっ、くふんんんんんんんんんんっ!」

食堂にいた誰もが達したとわかるほどの艶声を上げて、リセーラは背筋を仰げ反らせた。豊満な美乳をふるふると揺らしたあと、力つきてまた伯爵の肉に俯せになる。

若者の肉が抜き取られ、めくれ裏返った褐色皺から白濁液がにじみ出す。8の字の括約筋が弛み、肉を食い締める陰唇側からも、ごぼりと失禁かと思うほど大量の蜜が噴き出した。

リセーラの粘液を浴びて、ドロワーズのフリル全体が半透明になり、尻肌がみるみる露わになっていく。放射状に垂れ広がった蜜液は、伯爵の腰をドロドロと光らせ、白いクロスに大きな円形の染みを作っていく。精臭すら覆い隠すほどの甘い蜜匂が立ちこめる。

五年ぶりに味わった絶頂は、恐怖以外の何物でもなかった。調教地獄から抜け出してからの五年間が、いとも簡単に無に帰してしまふ。

もう駄目だった。もう狂い出した身体と子宮を止められない。

リセーラは許しを懇願するように、伯爵の首筋に抱きついて、乳首を胸板に押しつけた。「あらあら。リセーラ様、もうイッチャったんですか？ そんな気持ちよさそうに震えちゃって、可愛いわ。この程度でこれじゃ、また狂っちゃいますね。助けてあげますよ」

リーゼロッテを見て戦慄した。脱色液の入った瓶に大きな浣腸器を突き立て、透明な粘液を残らず吸い取っているのだ。粘液を満たした浣腸器の先が、ヒクつく褐色の皺に迫る。

「……や、め……ろ……やめ、て……そんなことやめて……お願いっ……！」

丸い先がくちゆりと肉皺に埋まり、一気に円筒を押された。直腸が液体で膨らまされる懐かしい異物感。浣腸液など問題にならないほどの疼痛が、直腸粘膜に突き刺さる。

「いやああああああっ、痛っ、痛いっ、お腹、お腹がっ、お腹の中があああっっ！」
瞬時に猛烈な排泄欲が湧き、羞恥で全身を真っ赤に染めながらも、リセーラは渾身の力で息んだ。淫猥なほど長く放射状に伸びた褐色皺が盛り上がり、中央から裏返って朱色の腸壁が覗く。めくれ広がった肉輪からぶゆるりと透明な粘液が噴き出た瞬間、二人目の若者が男根を挿入した。押し進められる亀頭に押され、大量の脱色液がまた浣腸される。

「むやああっ、お尻っ、お尻しないでっ、お腹痛いのっ、痛、痛いっ、お尻抜いてえっ！」

「ダメですよ。美しく誇り高いリセーラ様に、食卓で排泄なんてさせられませんから」

「お尻の中も外も痛いので、出させて、もう出させて、お尻の中から出させてえっつっ！」

「あらあら。伯爵様、リセーラ様が可哀想ですから、気持ちよくさせてあげてください」

伯爵が激しく動き出した。藍紫の瞳から涙が湧き、叫ぼうと開けた唇から蜜液のごとく、ごぼりと唾液が垂れる。膨れ広がった亀頭冠で膣管の肉襞を抉り擦られ、直腸の痛みと排泄欲すらも、黒い快楽に変わっていく。子宮が灼熱して脳裏がいとまたやすく白濁した。

二人目の男が精液浣腸を施して引き抜くまでに、リセーラは三度も峠を越えさせられた。「もう痛くないからやめて、なにもしないでえっ、お尻も陰唇もしないでえっつっ！」

美女が両手二本ずつ四本の指を肛門に挿入した。褐色皺がぐちりと四角形に広げられる。

「ひむやあああああ、広、広げないでっ、そんなに広げないでええっつっ！」

「でも、リセーラ様？ 次はこれくらい広げてないと辛いですよ？」

二人分の精液と脱色液を吐き出そうとした肉四角形を、呪術師の亀頭が塞いだ。

快楽と呼ぶには苛烈すぎる波に朦朧としながらも後ろを向いて、子宮の底まで凍りつく。

小男のぬめり光る男根は太さこそないが、長さが平均の二倍はあり、表面に無数の瘤が埋めこまれた異形な代物だったのだ。しかも肉全体がぶくぶくと禍々しく脈動している。

指拡張された肛門に、結腸の捻れをほどきながら、容赦なく根本まで突き入れられた。

「——お尻っ、おひりいやああ、長いっ、長いっ、長いっ、そんなに長いひやあああっつっ！」



「ほう。突きこまれただけでイキおったわ。ほら、リセーラ。何度も言っておっただろう。達するときは、自らの名を口にして主人に伝えろとな」

「うわっ、楽しみですね。リセーラ様でも、そんなはしたないこと言うんですか？」
リセーラを虐めるために存在するような腐肉塊が、蜜壺を隅々まで溶かす。呪術で拵こしらえただであろう禍々しく蠢く長莖が、真っ直ぐに伸ばされた結腸まで擦り抉る。二つの肉塊に下半身をどろどろにされ、わずかに残っていた理性の最後のひとかけらが墮ちた。

「……リセー……ラ……い、く……」

弱々しい声が食堂に響いた瞬間、テルテやサラたちの絶望にも似た息が漏れた。

その諦めの気配が真っ白になった脳裏に染み入り、リセーラの心が完全に五年前に戻る。
「……んっ、イルード様いいですっ、リセーラまたいきますっ、いくっ、いくうううっ、お尻っ、お尻の父様もいいですっ、イク、イクイクッ、父様、父様ああイクのおっっ！」
「うわあ、リセーラ様ってこんなに可愛かったんだ。今まで嫌ってたけど、なんかテルテちゃんより、大好きになっちゃった。ほら、リセーラ様？ 今、誰の肉でイッてるの？」
「イルード様ですっ、いえ父様っ、イルード様、父様、イルード様、イルード様あつっ！」
「ははっ、もう絶頂から下りてこられなくなつたようだな。ほら、リセーラ。まずは最初のご馳走だ。たっぷりと味わえ」

二人が前後からリセーラを抱きしめ、最奥で同時に達した。灼熱した粘液が弾ける。

「お、おいしいです……イルード様と……父様のが……中に……どんどん入ってきます……」
リセーラは泣き濡れたとろけ顔で、憎むべき伯爵に口づけをして舌を絡ませた。

※

食堂に冷徹だった女主人の悲痛な嬌声が響き渡っていた。

「リセーラ、もう自分で動きますからああ、イルード様はじつとしててくださいいっつ！」
テルテは泣き腫らした目を見開き、食卓で延々と陵辱される愛しい女主人を見ていた。
目を逸らさぬことで、少しでも痛みを分かち合おうとするかのように、伯爵に座ったまま、肛門を二人の男に代わる代わる四周も犯されている、可哀想な女主人を見ていた。

——突然、テルテはドレスの布ごと、肛門に指を根本まで挿入された。甘叫びして振り返ると、リーゼロッテが笑っている。怒りで気が狂いそうになった。そのまま、肛門でお尻を吊り上げられ、頬が机に押しつけられると、目の前に姫隷主従契約書があった。

「私はテルテちゃんが気に入ってるの。ほら、リセーラ様の陵辱を止めてほしかったら、テルテちゃんも伯爵様の姫隷になりなさい。今まで以上に虐めてあげるから」

テルテは迷わなかった。リセーラを助けたいという気持ちが強かったのだろう。布越しに肛門を抉られ、露わにされた双乳をこねられながらも、六枚目でサインを成功させた。

これ以後、リセーラとテルテは、伯爵の姫隷として性奴隷の扱いを受けることとなった。

第七章 狂宴

調教用ドレスに着替えさせられたテルテは、伯爵に命令された通り、一人で先に宮殿第四大広間へ入場した。シャンデリアが煌めく大部屋の真ん中に、唯一の先客がいる。

崩れた正座でペタリと座り、両手を頭上に吊り上げられているのは、リセーラだった。

皺洗淨と媚薬塗布で敏感になった乳房や陰唇を、裏地の羽毛に弄ばれて「んんんっ」と呻きながらも、三日ぶりに会えた女主人の元へ、背中大きなリボンを揺らして駆け寄る。

リセーラは普段通り拘束具似たのドレスを着ており、静かに眠っていた。テルテの気配に気付いたのか、瞼が震えて上向く。睫の下で揺らめく藍紫の瞳を見て、どきりとした。

あの食堂での陵辱以降の三日間、リセーラがどんな責めをされて、どんな乱れ方をしたのかは知っている。リーゼロッテが毎晩ベッドの中で、こと細かく教えてくるのだ。

そのため、大好きな女主人が心身ともに汚されて、ぼろぼろになっているのではないかと、気が気でなかった。だが、こうしてようやく会えたりセーラは、出会った当初と変わらぬ気高い不可侵の気配を纏っている。艶が一層増して、かえって美しさに凄みがかかったほどだ。とても、話を聞いただけでテルテが泣いてしまったほどの、酷い責めを受けた女性だとは思えない。まるで最高級の姫隷——ふと嫌な喩えが浮かび、三つ編みを振り乱す。

リセーラはまだ意識が混濁しているのか、テルテを力なく見据えて話しかけてきた。

「テルテ。なぜ、私のために伯爵の姫隷になどなった。……いや違うな。私は……お前になにを言つてやればいい？ どうやって償えばいい？」

キュツと胸が搾られた。また目の奥が熱くなり、涙が溜まってしまふ。

「そんな……償いなんていりません。これは、私が勝手に決めたことです。リセーラ様が心を痛めてるのでしたら謝ります。……解放されたら、今度こそ私に罰をください。こんな勝手なことをしたんですから」

リセーラが美貌をきよとさせた。頭上で手首を吊る鎖を鳴らして、軽く笑い出す。「そうだな。……解放されたら、もう一度、子羊の煮込みを作ってくれ。あれは美味しかった。……それがテルテへの罰だ」

あまりにも楽しそうに言うので、こらえきれず泣いてしまった。

リセーラの瞳にふと光が戻った。意識が覚醒したのか、口調が固くなる。

「ここは宮殿だな。——テルテ、なぜ調教用のドレスを着ている。まさか今から……」
誤魔化せるものでもない。テルテは伯爵の命令を正直に話すことにした。

「……はい。今から、リセーラ様の前で、私を……責めるそうです」

絶句したリセーラが唇を動かす前に、なんでもないことのように声を繋げる。

「あ、今夜は、リセーラ様には、直接手を出さないと言っていました。それに、私なら大丈

夫です。リセーラ様に調教を受けてましたから、これくらいへっちゃらです」

テルテは精一杯、笑ってみせた。責められることより、女主人の哀しい顔を見るほうが数段辛かったからだ。だが、リセーラは美貌を強ばらせて、黒髪を震わせている。

「テ……ルテ。日が沈んでから、何刻経ったかわかるか？」

「え？ 二刻と……少しですけど。……それが……どうかしたのですか……？」

緊張した気配が伝染して、テルテも唾を飲む。リセーラが「馬鹿な」と呟いて続けた。

「蜜会の……時間だ」

〈蜜会〉。所有者の許しさえあれば、姫隸にどんなことでも行える狂気の会。

——衆人環視の中、数十人もの男に犯されることも珍しくはないそうだ。

今度はテルテが凍りつく番だった。怯えを煽るように、会場の扉が音を立てて開かれた。

※

テルテが座りこんだまま放心している間に、二人の周囲を大勢の紳士淑女が取り囲んだ。皆、どす黒い笑みを浮かべて、まさに性玩具を鑑賞する目つきで見下ろしてくる。笑い皺を不気味に濃くする伯爵。巻き毛の金髪を樂しそうに揺らすリーゼロッテ。最も内側を囲ったのは、白い仮面で素顔を隠した全裸の巨漢。肉塊をいきり立たせた、二十人の肉男だ。「ひっ」と戦慄する間にも、テルテは肉男たちに寄ってたかって仰向けに倒され、二の腕についた枷を床の鎖に繋がれてしまった。両腕が真横に伸びた状態で拘束され、背中を上

げられなくされる。藻掻かせようとした白いストッキングで締まる両脚を、伯爵にピンと伸ばされて押さえつけられる。肩口から手の甲までふわりと膨らんで覆う極薄の白手袋を、肉男の八本の手で十字架へかけるように横へ伸ばして固められる。

背筋が怖気立ち、腰の大きなX字のリボンにお尻をぐりぐりと押しつけて暴れたが、短すぎる薄いスカートが三枚とも腰に跳ね上がって、純白のドロワーズの全貌が露わになってしまっただけだ。小ぶりすぎる乳房も、胸布の中でふるふると儂げに移ろっている。

それでもテルテは、とろけた幼い陰唇と膨らんだ乳首を、裏地の羽毛に弄ばれるがままに、小さな身体をくねらせていた。淫熱でコトコトと煮込まれる子宮と反比例して、脳裏が凍りついていく。恐怖で身体がずぶずぶと床へ沈み、新緑色の瞳に浮かぶ涙が膨らむ。

目の前に座るリセーラが、頭上で手首を吊る鎖を狂ったように鳴らした。

「伯爵！ テルテは生娘だぞ！ せめて、最初くらいはベッドで密やかに抱いてやれ！」

「心配無用だ、苦しませはせずに。私の手練はリセーラの身体が一番よく知っておるうちに衆人環視の中、肉男に弄ばれる生娘だろうと、よがり狂わせてやるわ。そこで見ておれ」

「さあ、テルテちゃん。今から貴族の皆様に見守られる中、肉男二十人に身体を觸られながら、伯爵様に女にしてもらえないのよ？ これ以上、嬉しいことなんてないでしょ？」

覗きこむリーゼotteが楽しそうに笑うと、リセーラが声にならない叫びを発した。

テルテは、女主人の眼前で責められると聞いたときから覚悟はしていた。見ているリセ

ーラに辛い思いをさせないために、微笑みながら口にする言葉まで考えてきたのだ。

——大丈夫ですよ。だって、私、リセーラ様に調教を受けた姫隷ですから。

極薄の白手袋が覆う細やかな両指に、ぬめり光る男根をぐじゅりぐじゅりと掴まされる。細い両腕をふわりと覆う極薄布を、黒肉塊がじゅぶじゅぶと押す。踊るへソに龟头がぬぶりと埋まり、太腿を締める白いストッキングに男汁を浸した龟头筆を二本つけられる。

——リセーラ様がされたことを思えば、これくらい、へっちゃらです。

胸布を上にかくられ、ぷるんとこぼれた膨らむ両乳首に、縦に伸びた鈴口がくぶりくぶりとはみつく。雀斑が可愛らしく散る朱色の小顔に、両側から肉瘤が押し当てられ、両頬が龟头形に潰れる。赤いリボンから伸びる二本の髪繩が、二つの肉茎表面にクルクルと巻きつけられる。頭頂部の生え際を陰唇に見立てて、じゅぶりと腐肉瘤が押しつけられる。

——でも、恥ずかしいですから、あんまり見ないでくださいね。

十四人の巨漢が、計算し尽くされたように身体を折り曲げてみっちりと群がり、少女の小さな身体への同時肉奉仕を可能にしている。全身に押しつけられた十四本の肉塊が、一斉にしごかれ出した。巨大な芋虫を八方で握り潰したように、ぐじゅると大量の粘液が滲み、猛烈な男臭が湧く。手足を覆う白薄布がぬらつき、乳首とへソと両頬にどろりと男汁が滲み、三つ編みが腐液で煌めく。

テルテの小さな身体は、もう肉男の巨体で覆い隠されていた。肉の隙間から狭い天井を

見ると、残りの男たちが肉茎をしごいている。ぬめり滴る男液が、蠟のように白肌を彩る。微笑もうにも、亀頭で押さえられて頬が動かせない。愛しい女主人を安心させようにも、魂の底から震えて声が出ない。テルテの大嫌いな男臭と男肉で、震える身体が動かせない。「……い……や……です……こんなの……い……や……です……」

おぞまじさが極限を超え、強ばった喉から迸った。

「いやああああああっ！ リセーラ様、お助けくださいっ——んぶうううっ！」
頬を撫でていた亀頭が、開かれた口内へぐぼりと押しこまれた。今まで調教で使用した肉道具が、いかに慈悲深い代物だったのかわかるほどの巨根だ。小さな唇が限界まで拡張され、喉奥まで一気に腐肉塊で満たされる。

テルテは新緑色の瞳から涙をこぼしながらも、小さな舌を健気に使って、口内の男の慈悲を求めた。だが、肉男は聞く耳も持たず、口内を膣道に見立てた苛烈な前後動を開始してしまう。口端から涎と男汁がじゅぶじゅぶと噴き、鼻腔に猛烈な男臭が立ち上る。

「むぶゆううううううううううっ！ ふぶゆむぶううううううううううっ！」

もうテルテは、肉轡越しに助けを求めることしかできなかった。リセーラが鎖を鳴らす。「テルテ！ くそっ！ 伯爵！ 騷るなら私を騷れ！ なんでもやってやるぞ！」

「あら、勇ましいですね、リセーラ様。でも、今にそんな余裕なんて、なくなりますよ？」
美女の声とともに、ようやくテルテの口内から糸を引いて肉塊が離れた。



口姦をしていた肉男が、しごき立てる肉茎をリセーラへ向ける。どぶりと白濁液が迸り、頬を打たれたように美貌が逸らされた。白液が頬を伝い、首筋に達したところで――、

「……ああ……なんだ……これは……」

リセーラが声を漏らす。首筋から胸元へと伝う粘液に沿って、服が溶けていくのだ。

「ふふっ。恥ずかしがり屋なりセーラ様が喜べるように、水溶性のドレスを着せてあげたんです。しかも、その布地は溶けると、もの凄く痒い媚薬になるんですよ。今夜の肉男の肉は、テルテちゃん独り占めしますけど、精液くらいは浴びせてあげますからね」

絶句したりセーラが、怒りに染まった美貌を俯かせる。首筋がぶるりと震えた。

「ほら、もう効いてきた。もの凄く痒いけど掻けないのが気持ちいいでしょ？ ……さあ、テルテちゃんは、帰ってきた男の肉を、舌で綺麗に掃除しなさい。中に詰まった美味い粘液も残らず吸るのよ。飲み残しがあったら、その可愛らしいお鼻で飲ませるからね」

肉まみれの小さな身体をビクリと跳ねさせたテルテの唇に、白濁液にまみれた男根がつぶりと密着した。おぞましさと特濃の精臭に気が狂いそうになりながらも、小さな舌で龟头から龟头冠、肉竿までミルクのように舐め、鈴口に口づけして管に溜まった粘液をチュルチュルと吸い出す。糸を引いて肉が離れた瞬間、テルテは白い涎を垂らして短く叫んだ。股間に陣取った伯爵が、両脚を左右に割ったのだ。

仕込まれたゴムの応力でドロワーズの前が割れる。フリルが左右に退去すると、テルテ

の十六歳とはとても思えない、挟り食いこむ幼い肉皺が露わになった。

「ほう、これは初々しい陰唇だ。まるで昔のリセーラのように、きつく挟れ割れておるわ」伯爵が陰唇を視線でこんがり焼きながら、白いストッキングで締まる両脚をM字開脚で固めていく。葡萄皮のようにドロワーズが左右にはちきれ、蜜でぬめり光る可愛らしいお尻が剥け飛び出す。フリルが尻房へ食いこみ、幼い陰唇を大人に見せようと開口させる。

「ははっ、これは愉快な作りだ。そら、肉男たち。もっと奥までめくり見せてやれ」M字にされた脚の付け根に、四本の手が左右から伸びる。陰核がぬらりと剥かれ、一重の簡素な肉花がぼろりと口を横にする。下では肛門粘膜が横に伸び広げられる。

おぞましさと同量の羞恥が、脳裏と子宮で爆発的に膨らむ。

「……そんなに……奥まで……広げないで……ください……恥ずかしいです……」

「さあ、テルテ。リセーラをも狂わせる主人の手技、身体で覚えてもらうぞ？」

そうして始まった伯爵の舌と指の股間責めは、全身をぬめる男根で愛撫されているおぞましさを忘れさせるほど、巧みで執拗だった。

陰核を吸い、処女膜と膣口の隙間を挟り舐め、肛門に指を突き入れて肉内から、未開通の膣道をくすぐる。性感の高ぶりがテルテ自身より見えているのかと思うほど、自由自在に少女の子宮を追い回し、虐め抜いていく。何度も達しそうになるが、そのたびに尻を叩かれ、あるいは太腿をつねられ、高みへの階段を引きずり下ろされてしまう。

「んあっ、痛いですっ、もうつねらな、やうつ、叩かないでくださっ、もう許してえっ！」
伯爵の執拗な責めを受けながらも、リセーラに放出した男根が、次々に舞い戻ってきて、休む間もなく舌と喉を動かさなくてはならない。粘液はもう鼻の下までべったりと塗られ、それを舐め取る暇すらないほどだ。濃い男臭と快楽で少女の理性が凄惨に削られていく。

当然、リセーラも胸元まで精液にまみれ、痒みで顔中を真っ赤にして震えている。

テルテのお尻が手形で埋まり、白いストッキングに朱色の痕がいくつもついたころ、めくり割られた幼い陰唇に、ピトリと伯爵の熱硬い龟头をつけられた。

——テルテは戦慄のあまり、二十人の肉男すら忘れた。

あの冷徹な女主人があればどこまでに狂ってしまう肉塊が、処女膜を押ししているのだ。

凶暴に太い肉茎、縦横に走る血管を辿った先の龟头は、急激にぼこりと膨らんでおり、龟头冠の段差が異形なほど激しい。伯爵が陰唇に密着させた肉茎を、しごき立て始める。

「さあテルテ。処花を散らすのが私であることを、幸運に思え。今より、テルテが達する瞬間を狙って、最奥まで一気に突きこみ、同時に精を吐き出してやるわ」

あまりに恐ろしい喪失計画を告げられて、テルテは菌をカチカチと鳴らした。

「テルテちゃん。伯爵様のこの技は凄いわよ？ 私は残念ながら味わえなかつたけどね。これをやられた生娘は、みんな喜んで伯爵様の肉奴隷になりたがるんだから」

「ははっ、怖がることはない。極限まで焦らされた絶頂、女となる痛み、雄の種を受ける

雌の生物的な喜び。これらが一体になると、もはや散花の痛みなど微塵も感じぬぞ。一突きされた瞬間から蜜壺が快楽に目覚め、腰を振って喜ぶようになるわ。……さて、テルテ。もう止めはせんから覚悟しろ。次に達した瞬間が、お前が少女をやめるときだ」

伯爵が亀頭で処女膜の肉輪を愛撫しながら、猛烈に肉茎をしごき出した。

テルテは精液でぬめる菌を食いしばった。おぞましすぎる計画をなんとか阻止しようと、達するのをこらえる。だがもう子宮はどろどろで、脳裏になす術もなく霧が垂れこめる。

「やだ……駄目です……もう……いくつ……あつ、我慢できない——やあああつっ！」

焦らしに焦らされたテルテの全てが白濁した瞬間。——ズクンと一気に子宮口を突き上げられる。その突きこみの慣性すら利用して、猛烈な進りが最奥をびゅくびゅくと洗う。脳裏と子宮に白い火花が散った。絶頂だった地点が底辺に変わり、さらに打ち上げられる。「——むやあああああああああああああああああああああつっ！」

会場中に少女の叫びが響き、紳士淑女たちがどよめく。

「テルテ！ くっ！ も、もうかけるなっ！ くあつ……み……見え……ちやう……」

リセーラの上着がぬらりと溶け落ちて左胸がまろび出た。俯いて全身を震わせる。

一方、テルテは混乱の極致にあった。処女をこんな苛烈な方法で奪われたというのに、伯爵が言った通り、微塵も痛みを感じないのだ。それどころか、服内が勝手に蠢いて、未知の快感すら子宮に伝えてくる。呼吸とともに、伯爵の存在が魂すらも占拠していく。

「どうして……痛くないんですか？ ……んんっ……これ……駄目です……」

未だ全身をぬめる男根に埋め尽くされながらも、か細い声しか出せなかった。肉を引き出され、凶暴な亀頭冠で膣道を挟まれた瞬間、女主人が狂った理由を身体で理解する。

「これ駄目です……私……リセーラ様ほど……強くないんです……気が狂っちゃいます……」

それが、テルテが明確に発した最後の言葉だった。あとはもう、伯爵が達するまで蜜壺を苛烈にかき回され、子猫のような叫びを上げたまま、絶頂から降りられなくなった。

テルテが気を失った頃、リセーラの上着が、胸下まで一気に濡れ溶けた。

※

「やつぱり、精液くらいじゃ、上半身を溶かすのがやつとです。気持ちいいですか？」

リーゼロッテが巻き毛の金髪を揺らして覗きこんできたが、もはやリセーラは答える余裕すらなかった。上着は腰まで溶け落ち、震える白い肩や双乳がなす術もなく、好色な紳士淑女たちの視線に晒されている。美貌をぬめらし、双乳をまんべんなく覆って、おぞましい精臭を臭い立たせている粘液は、テルテの身体で達した肉男たちの入りだ。

リセーラはぬめる頬を羞恥と痒みで真っ赤にして、溶け残った手袋に覆われた両手首を頭上でカチャカチャと鳴らして、媚薬で硬化しきった桜色の乳首を震わせていた。

「さあ、変態なりセーラ様を、もっと恥ずかしくしてくれる素敵な人を紹介しますよ」

会場の扉が開き、童顔な女性が二人の肉男に両側を挟まれて入場してきた。肩までの黒

髪に、ちよこんと載った白いブリム。白いフリルで彩られた膝丈のメイド服。

「サラ！ ……どうして。くっ、伯爵！ サラたちは巻きこまない約束だったはずだ！」
睨みつけると、伯爵は気絶したテルテを鎖から外しているところだった。

「おっと、誤解するでない。この女は自ら、今夜の宴に身体を差し出したのだ。リセーラとの契約解消の期間を一ヶ月縮めてやる、という条件でな。なに、約束は守るぞ。もはや、リセーラを屈服させるのに、あと二ヶ月もあれば充分すぎようからな」

リセーラは絶句した。傍らまで歩いてきたサラが肉男に怯えつつも、にこりと微笑む。
「お館様。わたくしにだって、これくらいのはさせてください。……家族がおりますから、これ以上のことをできないのが心苦しいですが」

また胸がキュッと痛む。一時、身体の痒みも羞恥すらも忘れた。

「さあ、感動の再会も済ませたことでよし、リセーラ様をもっと喜ばせてあげますよ」

テルテに群がっていた肉男が、リセーラを取り囲んだ。双乳を揺らして身をよじる間に、手首を拘束していた鎖が外され、上体を仰向けに引き倒される。今度は真っ直ぐ横に伸ばした両手首を、床の鎖で拘束されてしまう。胸脂肪がぶるんと広がり、膨らんだ羞恥をさらに煽るように、両足首が頭側に折り曲げられていく。そのまま両足首が左右に広げられ、両手首と同じ位置で鎖に繋がれてしまった。九〇度以上の大開脚を強いられ、濃紺色のスカートで覆われたお尻を身体の頂点で掲げ見せる羞恥姿勢だ。美貌がさらに朱に染まる。

「——くっ、な、なにをする気だっ！……こんな……惨めな……格好をさせてっ……！」
「あら、素敵な格好。さすが幼い頃から颯然といただけあって、身体が柔らかいですね。さてリセーラ様。さつきまでサラに、どんな責めをやっていたか教えてあげましょうか？」
サラが白いブリムを跳ねさせた。そういえば彼女は、真つ赤な顔で小刻みに震えている。
「肉責めはしてませんから安心してください。ただ、媚薬と利尿剤を飲ませて、宮殿の庭を一周させてあげただけですよ。漏らさずに耐えきれれば、例の条件を飲むって約束でね」
見上げると確かにサラは、極端な内股で真つ赤に震え、恥ずかしそうに俯いている。

「サラ。今、リセーラ様は水溶性のドレスを着てるの。水に溶けると猛烈な痒みを伴う媚薬になるドレスをね。さあ、サラ。溜めに溜めたおしっこを、あなたの大好きなリセーラ様にかけてあげなさい。恥ずかしがり屋なりセーラ様の服を全部溶かして、喜ばせるのよ」
リセーラの床に散り広がる黒髪がビクリと震え、サラの赤い顔が蒼白になった。

「そ、そんな……お、お待ちください……お館様にそんなことを……するわけには……！」
肉男が震えるサラの膝裏に手を入れ、幼女に用を足させる羞恥姿勢に固めてしまった。蒼白にした童顔がカットと朱色に戻り、両手を左右を挟む肉男に羽交い締められる。膝丈のメイド服のスカートが腰まで一気にまくられ、真ん丸とした瞳がじわりと羞恥で潤む。フリルで彩られたスカートの下は、元よりなにも穿いていなかったのだろう。健康的に締まった太腿と、柔らかそうなお尻が露わになった。サラが、耳まで真つ赤にして俯く。

「あら、サラのソコ、初めて見たけど、顔と同じく童顔ね。あなた、本当に二十八なの？」
サラの陰唇は恥毛がみっしりと生え揃っているが、陰肉にはなんとまだ縦皺が残っている。すでに尿意が限界に達しているのだろう。チロリと覗く陰核包皮と褐色の肛門がヒクヒクと震えていた。メイドの初々しい恥じらいぶりに、周囲の紳士淑女が声を揺らめかす。放尿準備の整ったサラを頭上に置かれたリセーラは、当然、追いつめられていた。

お尻を最上部に掲げ、両脚を苛烈に開脚している羞恥姿勢だが、今現在は、濃紺色のスカートが、両脚のみならず上半身すらも覆い隠しているので、かえって恥ずかしくはない。だが、この羞恥開脚状態で服が溶けたらと考えると、心の底から怖くなる。

だが、叫んでしまえば、サラを苦しめることになる。リセーラは掲げられたお尻を震わせて、朱色の美貌を背けて臉を伏せ、歯を食いしばって羞恥と痒みに耐えていた。

※

処女喪失直後にもかかわらず生まれて初めての連続絶頂に陥り、気絶すらしてしまったテルテだったが、小さな身体を持ち上げられた感覚がして、やんわりと意識が戻ってきた。臉を開けると、調教用ドレスがどこもかしこも男汁に濡れて酷い状態なのに気付く。すぐ前方の宙に、予想外の女性を見つけて、ぬめる三つ編みを跳ねさせた。

「……え？ サラさん……どうして……ここに……？」

サラは肉男三人に、幼女に用を足させる恥ずかしい格好で拘束されている。腰までまく

られたスカートの下から、可愛らしいお尻と陰唇が覗き、童顔を真っ赤にして震えている。親しいメイド頭が見慣れぬ羞恥姿をしているのは、見ているほうも恥ずかしい。テルテは混乱しながらも、雀斑の散る頬を染めて俯いて、——心臓がドクンと鳴った。真下の床に、大好きな女主人がお尻を最上部に掲げて大開脚する羞恥姿勢で拘束されて目を閉じているのだ。自分もサラと同じ放尿幼女姿勢で伯爵に担がれているのに気付き、全てを悟る。「お目覚めね。あら、説明する必要もないって顔ね。テルテちゃんも、あれだけ虐められたんだから、おしっこが溜まつてるでしょ？ リセーラ様のために、漏らしてあげなさい」

「——リセーラ様に、そんなこと、できませんっ！」

「あらあら。二人とも我慢は身体に毒よ？ 陰唇をみんなでめくり広げて、尿口をリセーラ様にしっかりと向けててあげるから、思う存分、皆様の前で恥ずかしく漏らしなさい」
短く叫んだテルテとサラの陰唇に、肉男の指がかかる。下から順に尻房が割られ、肛門粘膜が、膣口が、剥かれた陰核が横に伸び広がる。陰核下に潜む尿口を下へ向けられる。

「リセーラ様に……そんなことっ、他のことなら何でもしますから、許してくださいっ！」
「わたくしもです……くっ、お館様にこんなことをさせるのだけは、堪忍してくださいっ」
テルテの両手も両側の肉男に羽交い締めになれ、羞恥姿勢を強いる伯爵の両手が、膝裏から足首へと滑っていく。足枷を持たれ、今度はさらに恥ずかしいV字開脚にされてしまう。開通したばかりの膣口は赤く腫れているが、大量の蜜液に流れてしまったのか、血は

一筋も見えない。蜜液がねばり垂れる薄桜色の肛門に、ピトリと伯爵の龟头が当たった。

「ほれ、観念しろテルテ。今より肛門を抉る。我慢できるものならしてみろがよい」

怖気立ち、三つ編みを跳ねさせると、すぐ目の前でサラもV字開脚にされておろし、肉男の龟头を肛門につぶりと添えられていた。「ひっ」とサラが朱色の童顔を強ばらせる。

テルテの敏感な肛門にさらに肉が埋まり、子宮がまた加熱を始める。尿口が震える。

「駄目です、お尻……まだしたことないんです……んっ、ああっ、いやああああっっ！」

テルテの尿口が持ち上がり、透明な小水が微かに漏れた。力が弛むとともに桜色の肛門が裏返り、龟头をぐぶりと丸飲みしてしまう。痛みと快感とおぞましさと理性を削られながらも、渾身の力で括約筋を締めた瞬間、敏感すぎる肛門で伯爵の龟头冠を食い締めてしまい、簡単に達してしまう。脱力して一気に根本まで男根が埋まり、激しい失禁が始まる。

「んああっ……リセーラ様っ、リセーラ様あっ、すみませんっ、すみませんっっ！」

シャアツと透明な迸りがリセーラのスカート洗っていく。サラも苦悶の呻きを上げる。

「……わたくしも、もう……駄目、お館……様……申し訳ありません——ああああっっ！」

サラの肛門にも肉男の男根がずくと一気に沈む。溜め込んでいただけあって、サラの透明な小水はジュユツツと勢いよく放たれ、濃紺色のスカートを直接散り飛ばしていく。伯爵とリーゼロッテ、周囲から視姦する貴婦人たちが狂ったように嘲笑する。

羞恥と痒みからか黒髪を振り乱し、それでも二人の心痛を思っただけか、呻き声一つ上げな



い女主人に、テルテとサラは泣き叫びながら二条の進りを延々と放ち続けた。

※

上半身を覆っていた精液を洗い、身体を隠していたスカートを散り溶かしながら、熱く甘い二条の小水がかけられる。心を許しあつた二人の液だ。もちろん汚いとも屈辱だとも思わない。だが羞恥と痒みで、小水を嫌悪しているように髪を振り乱すことを、どうしても止められない。最後にジュッジュッと断続的な進りを発して、ようやく水流が止まった。リセーラは唇をわななかせ、恐る恐る顔を上向かせた。

もう身体を覆っている物は、肩口から覆う溶け残った手袋と黒い首枷だけになっていた。柔らかさそうに広がる胸肌の頂点で、桜色の乳輪と乳首がヒクヒクと痙攣を繰り返している。露わになつた腰とヘソ。きつく折り曲げられた身体。両脚は極端な開脚を強いられており、薄い恥毛がべつたりと張りつく薄桜色の陰唇が、驚くほど間近で二重の口を広げている。頂点に追いやられた尻房は割られ、異様に長く放射状に伸びる桜色の肛門皺が、別生物のように淫猥に蠢いていた。

周囲から視姦する紳士淑女たち。羞恥が子宮を焼き尽くす。

「やつ……見、るな……こんな格好……やめ、ろお……そんなに見るなあああっ……！」
いつも通り狂つていれば楽だっただろう。だが、直接性感を受けていない影響で、女に戻りきれないのだ。お陰で、より強い羞恥が脳裏と子宮に突き刺さってくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>